



プロジェクト第一弾の「オロロジカルマシーン No.1」は、左右に文字盤を従え、通常の時計より一段高く突き出たトゥールビヨンのキャリッジが目を奪う。その姿は、未来から飛来した未知なるマシンという印象さえ与える。

マキシミリア  
オロジカール

# ラジカ

マキシミリア・ブツサー & フレンズ  
「マシーンNo.1」

## カルな夢の結晶

2006年春のバ  
場で、マキシミリア

たり会った。うっす

ンズにジャケットを

ったその姿は、ハリ

時代のあの一分の隙

込み、貴公子然とし

放つ彼とはまったく

ツクスしており、そ

な雰囲気さえ湛えて

「まったく新しい

している」と嬉し

から、前代未聞の時

いることは察せられ

「お楽しみに！」

そこで質問の矛先

たちの写真はどう

たずねてみた。子

MB&F（マキシミ

&フレンズ）の計

したときに象徴的

である。たくさん

ジュした無邪気な

たいどのようなメ

いるのだろうか？

いたからである。

「私たちはいま、



新しいコンセプト、メカニズム、デザイン、マテリアル……  
機軸時計は、長くは過ぎずとも年に4進化を遂げている。  
リー・ウインストンの「オーパス」はまさにその象徴だ。  
05年までそのプロジェクトを指揮し、ついに  
目を浴びてはたマキシミリアン・ブツサーが  
社を辞して立ち上げたマキシミリアン・ブツサー &  
フレンズは、さらに先をゆく。「夢、時計」という、  
「にも」が前代未聞の計画に迫る。

「オロジカールマシーンNo.1」は、東京・銀座の高級時計専門店「アワーグラス銀座店」常連店で撮影される。マキシミリアン・ブツサー（左）と同店代表取締役の野村誠司（右）は、今は「フレンズ」のメンバー。

いる。無限の可能性を信じたが、ブ  
ロジケクトに取り組んでいるところだ  
が」と意味深長な笑みを浮かべる。誠  
は深まるばかりだった。

マキシミリアン・ブツサーが、その職  
初の成果を持って来日したのは、5カ  
月後の9月下旬のことだった。東京・  
銀座の高級時計専門店「アワーグラス  
銀座店」で初めてブライベイト・ビネ  
ーイングが行われたのだ。

彼が石の面に刻し出したのは、不意  
議な形をした時計だ。それは、世にクニウチ  
ツチではな、これが初のオロジカ  
ルマシーン」である。ラウラドケース  
の時時計をまたがる身体にならざる外観  
は、その字のよきにも思ふべ、疑念をた「無

菅原 茂 (取材・文)  
Tada Shigeru (撮影)  
秋田大輔 (写真)  
Photography by Shigeo Aki

「夢」の表裏のようにも思える。中心に

トゥールビヨンがあり、それを挟んで左側に時間、右側に分の文字盤が配置されている。時間を表示する一種の装置として見れば、たしかに「ウォッチ」と呼んでもおかしくはないのだが、彼はあえて「オロロジカルマシーン」と命名する。「オロロジカル」とは「時計の」という意味であり、「マシーン」は「種々の部品が集まって作動する機械」を指すので、概念上では「時計」と変わりなく、言葉のレトリックとも受け取られそうだが。

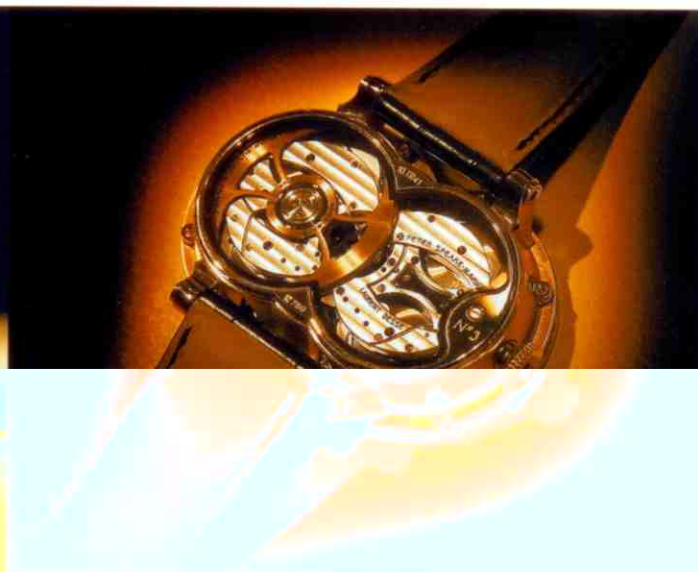
「これまでの『ウォッチ』は、あくまでも伝統の延長線上でしかなかった。私のオロロジカルマシンは、たしかに時刻を表示しますが、そのような伝統と断ち切れたところから出発しているのです。精密工学の粋を集めて作られた、時を告げる立体的な彫刻のようなものなのです」

さらに、彼との会話の中で、創作の真意を読み解く鍵が見つかった。それはDNAの否定という発言だった。

「著名なブランドは、つねにDNAを強調し、一貫した個性を謳いますが、私はアンチDNA、アンチ伝統を掲げ、なにもものにとらわれない自由な発想で創作を行いたいと考えていました」

ハリー・ウインストンの「オーパス」シリーズを指揮し、知る人ぞ知る独立時計師たちを世に送り出したのも、根は同じだろう。だが、自由な創作のためには、「自分自身もエスタブリッシュユされたブランドから自由になることが必要だ」と考え始めていたという。

彼は、ジャガー・ルクルトを経て、1998年に31歳の若さで、ハリー・



ウインストン・レアタイムピースの

社長に就任。在職中の7年間は、時計のデザイン、開発、製造、マーケティング、販売まですべてを統括し、総売り上げを900%も増大させた。毎年発表される「オーパス」も脚光を浴び、すべてが順風満帆だった。しかし、昨年の夏にその職を辞し、たったひとりでMB&Fを立ち上げたのである。

最初の構想は、すでに2003年に芽生えていたという。ジュネーブに戻る長距離飛行の中でのことだった。

「私は円がふたつ重なり合う時計を思いつきました。一方に文字盤を置き、もう一方は独立時計師に自由に遊んでもらうようなフリースペースとして提供する。そんな漠然としたイメージが浮かんできたのです。紙にペンを走らせてスケッチしているうちに自分自身わくわくしていました」

そんな一枚の、本人曰く「落書きのようなスケッチ」は、やがて時計デザイナーのエリック・ジローによって立体的なフォルムへと仕上げられ、エンジニアのローラン・ベッセや独立時計師のピーター・スピーク・マリソンの協力によって斬新を極めるトゥールビヨン・ムーブメントが設計され、徐々に「オロジカルマシーンNo.1」へと姿を変えていったのである。

「製作に携わったのは、それぞれの分野で才能を認められた優秀な個人ばかり。すべて、共通の価値観を分かち合う私の友人です。楽しく仕事のできる少人数の仲間たちと、同じ夢の実現に向けて働くのが、以前から私にとって理想だったからです」

## 才能が結集した プライベートレーベル

「オロジカルマシーン」のプロジェクトは、精鋭たちの「ドリームチーム」で編成されている。それは同時に「夢を描く集団」でもある。

「No.2は、まったく違ったものになります。同じことの延長や繰り返しはありません。チームのメンバーも変わります。でも、参加するすべての友人に共通するのは、子供の純粋な世界観です。誰でも子供の頃は、自分には無限の力があり、あらゆる事が可能だと思っていたでしょう。どんなに突飛な夢でも信じていたはず。それが成長の過程で大人たちから理を含められ、たいていは分別を重んじる平凡な人間になってしまふ。MB&Fのオロジカルマシンは、そんな子供心を取り戻す「プレイグラウンド」です。あれもしたい、これもしたい、こんなこともできそうだ——「作ごとにそんな可能性に挑む場なのです」

したがって、マキシミリアン・ブッサー&フレニスも「ブランド」ではなく「レーベル」である。音楽ならクラシックからロックまで、さまざまなジャンルがひとつの「レーベル」にあるような写真に写っていたのは、このドリームチームの面々であり、彼らの子供時代の姿なのだ。しかし、単なる純真無垢なコードモトは違う。なにをしかすかわからない、周囲を震撼させる「恐るべき子供たち」なのだ。

